福井市立郷土歴史博物館
Fukui City History Museum
展示解説シートNo. 103

刀に彫る
―刀身彫刻の世界―

●主　催　福井市立郷土歴史博物館
●会　場　2階 企画展示室
●会　期　平成29年3月24日～
　　平成29年5月7日

はじめに

日本刀は、その長い歴史の中で武器としての機能が追求される一方、制作者や使用者の信仰などを反映して、単なる武器以上の宗教的・象徴的役割を付されてきました。古くから刀身にほどこされてきたさまざまな彫刻は、それをよく伝えています。また近世には、制作者がその技量の限界に挑むような、技巧を凝らした濃厚な彫刻も見られるようになりますが、これらも刀の姿との調和によってその美的側面を際立たせています。

ここ福井でも、刀身彫刻の名手・喜内（きない）（木内・記内）をはじめとして、越前新刀の刀身彫刻（越前彫）が隆盛しました。今回の特別展「刀に彫る―刀身彫刻の世界―」では、この「越前彫」に注目するとともに、歴史的な名品から現代の匠の渾身の作まで、刀身彫刻の歴史を概観し、広く紹介いたします。失敗の許されない、わずかなスペースの中に表現された、信仰と美の世界をご覧下さい。

刀身彫刻とは

日本刀の刀身彫刻は、まだ日本刀が成立する前の古墳時代の直刀などに施された、金・銀象嵌（ぞうがん）の意匠や銘字にそのルーツを持ちますが、本来は戦いのための武器である刀に、信仰や権威の象徴（しょうちょう）としての意味を付け加えている（単なる装飾ではない）という意味で、これら古代の刀と日本刀の彫刻は共通しているといえます。独特の製法と形状をもつ「日本刀」が生まれたのが平安時代後期頃といわれていますが、その当時の刀にも既に刀身彫刻が見られるのは、そのような伝統を受け継いでいるものといえます。

一方で、平安後期以降の日本刀に見られる刀身彫刻は、専（もっぱ）ら仏教的なモチーフで占められるようになります。これらは特に密教の儀軌（ぎき）（儀式や図像に関する規則）に則して施され、その力をもって相手を調伏（ちょうぶく）（祈祷（きとう））によって災厄や敵を退ける）したり、自らの身を護るという効果が期待されたものだといわれています。

こうした日本刀の刀身彫刻の意味は、現代に至るまでほぼ変わりませんが、特に戦国時代末期以降（刀剣史では「新刀期」といいます）は、それまでの定型的な表現から脱した自由な表現が目立つようになり松竹梅その他の吉祥の表現なども多く見られるようになります。

（右）梵字（カーン＝不動明王）に三鈷剣の彫刻
脇指　銘　相州住廣正
宝徳元年十月日
（宝徳元年（1449）越葵文庫 当館保管）

蓮台（れんだい）・鍬形（くわがた）

蓮台は蓮の花を横から見た図を意匠化したもので仏尊が座する蓮華座を表すものと考えられる。鍬形は兜の前面の前立（装飾）の一種として付けられる鍬形に形状が似ていることからこの名があるが、何をかたどったものかは実はさだかではない。鎌倉時代末期以降、相州系の刀工の作品を中心に、種字・蓮台・鍬形の三要素を連ねた「重ね彫り」が多く見られるようになる。記号化・象徴化されたモチーフを一定の法則で配置することから、何か密教儀軌に則した表現ではないかと考えられる。

（右）梵字（バン＝金剛界大日如来）・
蓮台・鍬形・素剣の重ね彫り
刀　無銘　初代康継　安宅貞宗写し
（桃山時代　個人蔵 当館保管）

素剣（すけん）・三鈷剣（さんこけん）

両刃の剣をかたどったモチーフ。素剣は剣の刀身のみをかたどったもので、三鈷剣は剣の刀身に密教法具である三鈷杵（さんまやぎょう）形の柄を装着した形。三鈷剣は不動明王の持物であり、不動明王の三昧耶形として表示される。素剣はその三鈷剣を省略した形といえる。

①　②

（左①）素剣の彫刻
脇指　銘　兼元
（室町時代末期
越葵文庫 当館保管）

（左②）三鈷剣の彫刻
脇指　銘　（葵紋）以南蛮鉄
康継末世剣是也
本多飛騨守成重
所持内（立葵紋）
（桃山時代　個人蔵 ）

護摩箸（ごまはし）

太さ・長さの等しい二本の直線が平行となったシンプルなモチーフ。ちょうど箸のように見える。護摩を修するときに用いる箸をかたどったといわれるが、定かではない。護摩箸の下に「爪」と呼ばれる三鈷杵の省略と思われる爪状の突起が付属することもあり、素剣をさらに省略したものとする説もある。

（左）護摩箸
の彫刻
脇指
朱銘　左安吉
（南北朝時代
個人蔵）

梅龍（うめりゅう）

新刀期になって初めて見られる濃密な彫刻の一種で、梅の木に龍が巻きついている図。倶利迦羅のモチーフから派生したものと思われ、「梅倶利迦羅」と呼ぶことも。江戸時代に一竿子忠綱の作品に見られるほか、月山貞一の作にもまま見られる。

（左）梅龍の彫刻
刀　銘　大阪住月山貞一
精鍛
彫物同作
明治二十七年
十二月日
（明治27年（1894）
東京国立博物館蔵）
image:TNM Image Archives

ギャラリートーク（担当学芸員による展示解説）
3/25（土）・4/9（日）・4/29（土）・5/4（木祝）・5/7（日）14：00～
その他、特別展関連イベントについては当館ＨＰをご覧ください。
福井市　郷土　検索

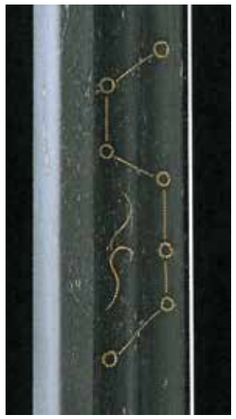
展示解説シートNo. 103　平成29年3月24日発行
福井市立郷土歴史博物館
福井市宝永3-12-1　電話 0776－21－0489
担当：松村 知也　Fax 0776－21－1489
印刷：白崎印刷㈱

刀身彫刻のいろいろ

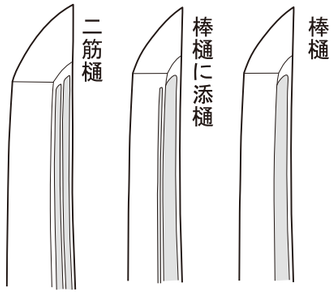
日本刀に見られる彫刻は、他の器物にあらわされる装飾表現や図像とは一線を画する、独特のモチーフが多いため、初めて見る方が「なにこれ？」と不思議に思われるものも多いかと思います。ここでは本展に出品された作品に見られる刀身彫刻を中心に、いろいろなモチーフを解説します。

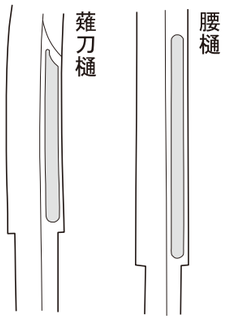
北斗七星

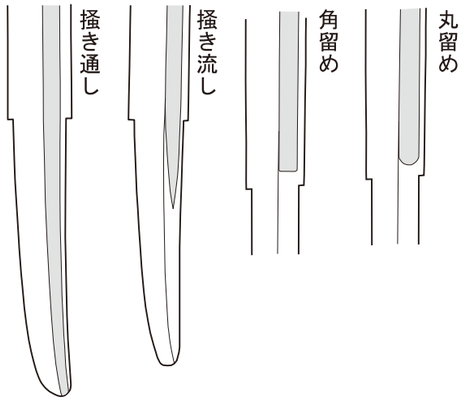
北天にうかぶ北斗七星の意匠。中国の道教思想に基づいたものといわれている。この意匠が施された刀には破邪・破敵や鎮護の力があるとされる。道教の最高神は北辰（北極星）が神格化された紫微大帝であるが、これと北斗七星が神格化された北斗神君は習合して同一視され、仏教にも取り入れられて妙見信仰となった。



（右）蹴彫に金象嵌でほどこされた北斗七星
直刀　銘　傘笠正峯作之
癸亥年二月日
（四天王寺所蔵七星剣（飛鳥時代）の写し）
（昭和58年（1983）　石川県立美術館蔵）







樋のいろいろ

樋は刀身の鎬地に溝を彫り込むもので、彫刻の一種とみなされる。
樋を彫ることを「樋を掻く」という。

- 一本の溝を彫り込む「棒樋」
- 棒樋の側に細い溝を付属させる「棒樋に添樋」
- 二本の比較的細い溝を彫る「二筋樋」
- 刀身の全体でなく、腰部のみに彫る「腰樋」
- 薙刀に彫られる独特の形状の「薙刀樋」

などがあり、樋の終端の処理にも分類がある。

- 樋を茎の下端まで彫りとおすもの･･･「掻き通し」
- 樋の下端を自然に浅くしていき終息させるもの･･･「掻き流し」
- 樋の下端を丸形におさめるもの･･･「丸留め」
- 同じく角形におさめるもの･･･「角留め」

その目的は他の彫刻と違い、多分に機能的なものと見られている。つまり構造の強度の低下を最小限に抑えながら重量を軽量化するというもので、材料力学の計算によると、棒樋を掻いた刀は、樋のない刀に比べて曲げ強度が約５％低下するものの、約１５％の重量軽減がはかられるという評価もある※ 。

樋は日本刀に特有のものというわけではなく、西洋の剣にも同様のものが見られ、やはり重量軽減への工夫とみられている。

※臺丸谷政志2016『日本刀の科学』サイエンス･アイ新書

倶利迦羅

両刃の剣に龍が巻きつき、さらに剣の先を龍が呑み込もうとしている図で、不動明王の三昧耶形（仏を表す象徴物）の一つ。「倶利迦羅龍王経」には明王と外道（仏教以外の教え）とが共に智火（智慧の火）の剣に変じて争い、明王は倶利迦羅大龍となって外道を呑まんとして従えたという説話が語られている。倶利迦羅は、サンスクリット語では「クリカ」という、バラモン教の文献に記される龍王で「半月を頭に戴き火炎と煙とが全身に輝く」と表現されており、不動明王との類似性がみられる。

倶利迦羅の彫刻の表現には、龍や剣の姿を写実的に彫るものと、線を省略して半ば記号的な表現をとるものがある。書体の真・行・草になぞらえて、前者を真の倶利迦羅、後者を程度によって行、あるいは草の倶利迦羅と呼ぶことがある。

（左）真の倶利迦羅の彫刻
脇指　銘　備前国弘次
平成二十五年春 柳匠堂重恒彫之
（泉本哲弥氏蔵 ）

（右）草の倶利迦羅の彫刻
脇指　銘　銘　越前国住兼植
（江戸時代初期　個人蔵）

梵字

仏教で用いられてきた悉曇文字のこと。悉曇文字とは６世紀のインドで成立したシッダーマトリカ文字で、これによって書かれた文献が漢訳された経典とともに日本に伝来した。特に平安時代に空海や最澄が唐から悉曇梵語の経典を大量に持ち帰り、「真言」として一般にも広まるようになったという。梵字は難解なために、文字自体を仏法の聖なる文字として崇めており、それ自体に霊的な力があると信じられることになった。また密教では仏尊を象徴する一音節の呪文（真言）を「種字」として梵字一字（または二字）で表す。修法において本尊となる仏を想起するためのシンボルとなるので、これを植物の種にたとえて種字という。刀身彫刻で表現されるのはこの「種字」で、不動明王を表す「カーン」「カンマン」、毘沙門天を表す「ベイ」などが多く見られるが、こういった種字が刀身彫刻の背景にある信仰の内容を示しているといえる。

（左）梵字「カンマン」
短刀　銘　アリハウシ
（室町時代後期
越葵文庫　当館保管）

（左）梵字「ベイ」
太刀　銘　豊後国行平作（佩裏銘）
（鎌倉時代初期
東京国立博物館所蔵）
image:TNM Image Archives